

スペイン語はスペイン、ラテンアメリカ18ヵ国、赤道ギニアの公用語であるが、アメリカ合衆国をはじめドイツ、フランス、フィリピン、オーストラリアなどスペイン語が公用語でない国にもスペイン語話者が多数住んでいる。加えてEU諸国、アジアそしてブラジルなど第二言語としてスペイン語を学ぶ人も増加の一途にある。話者数は現在4億を数えており、今世紀中に5億を超えることが予測されている。

スペイン語は多大な人口を誇る広域言語であり、英語について普及度の高い言語である。広域言語にはつきものの地域差(方言)はあるが、非常に均質的な言語であり、「スペイン語はひとつ」といっても過言ではないだろう。

ラテンアメリカは広大である。かつてこの大陸には2000もの言語が話されていたが、ここにコロンブスがスペイン語を初めて運んだ。1492年10月12日のことだ。スペインの征服と植民の過程で土着語が激減する一方、スペイン語は領域を拡張してブラジルを除く18ヵ国の公用語となった。話者数は今日、約3億といわれる。

筆者は若いころスペインで学んだスペイン語を使って北はメキシコから南はアルゼンチンまでスペイン語の旅をしたことがある。スペインで学んだスペイン語がどこでも通じることに感動した体験は今も忘れられない。もっとも通じることは通じるが18ヵ国ともなれば同じスペイン語でも発音、文法、語彙においてじつに多様ではある。例えば、スペインではバスを「アウトバスautobús」というが、メキシコでは「カミオンcamión」、グ

アテマラでは「カミオネタcamioneta」、ペルーでは「ミクロブスmicrobús」、チリでは「マイクロmicro」そしてアルゼンチンでは「コレクテイボcolectivo」とめまぐるしく変わる。

これではスペイン語はひとつとはいえないのではないかとの疑問に学問的見地から答えてくれるのが、本書『ラテンアメリカのスペイン語 Latin American Spanish』(1994)である。驚くほど多様に見えるラテンアメリカのスペイン語が意外にも統一していることを膨大な資料を駆使して見事に明らかにしたからである。

本書の最大の特徴は、ラテンアメリカ全体のスペイン語の発達をたどったあと、各国別のスペイン語が歴史的背景・音韻・形態・統語・語彙のそれぞれの部門で余すところなく網羅されている点である。ラテンアメリカのスペイン語に関する本は少なくないが、その多くは内容がスペイン語の方言の言語学的分析にとどまり、専門家以外の読者には近寄り難い印象を与えてきた。

しかし、本書では、言語学的分析に加えてラテンアメリカの社会情勢、民族学、植民地支配に伴う奴隷制と移住といった歴史的背景など言語外的要素が盛り込まれており、おそろしく幅が広く奥行き深いラテンアメリカのスペイン語世界に日本の一般読者をも誘う「案内の書」の趣も備えている。日本語版に「言語・社会・歴史」の副題が付けられたのは、名案であろう。

日本では近年、スペイン語学習者の急増にともないスペイン語学書の出版も増加の傾向にあるが、ラテンアメリカのスペイン語の本となればまだ数えるほどしかない。その意味でも、本書出版の意義は大きいといえよう。

ばんどう しょうじ (教授・スペイン語学)